

おほ ま あら こ
大目亀籠

—— 文字記録に残る古代日本製外洋航海船 ——

仏教大学教授 黄 當時

0. はじめに

海幸彦・山幸彦の話の中に、山幸彦が釣針をなくして海岸で泣いていた時に、シホツチの老翁が来て、ある船を造り、ワタツミの宮に行かせる場面がある。

この船には、幾つかの名称がある。『古事記』(上巻)では、「^{まなしかつまのおふね}無間勝間之小船⁰⁰¹⁾」/「^{まなし}無間勝間之小船⁰⁰²⁾」であるが、『日本書紀』では、「^{まなし}無目^{かたま}籠⁰⁰³⁾」(神代下、第十段、正文)、「^{かたま}無目堅間⁰⁰⁴⁾」(神代下、第十段、一書第一)である。そして、これら(以下、姉妹船)以外に、さらに一つ、「^{おほまあらこ}大目亀籠⁰⁰⁵⁾」(『日本書紀』神代下、第十段、一書第一)という名称も持っている。

「大目亀籠」という名称は、姉妹船のそれとかなり異なっているが、この表記に間違いはないのだろうか。同じできごとの報告でありながら、姉妹船は沈まず、「大目亀籠」はすぐ沈む。これほど大きな解釈の矛盾をどう理解すべきかについて、合理的な解説や説明がなされていないが、それは手の出しようがないからではないのだろうか。海の経験の乏しい私たちに、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識等が不足してはいないのだろうか。

「大目亀籠」は、一見、手の付けようがないように見えるが、仮に、私たちの視点を、この説話を残した人々の視点にもう少し近づけることができるならば、何とか理解できそうにも見える。この説話を残した人々の視点とは、いわゆる海の民の視点であるが、具体的には、彼らの言語や文化についての知識ということになろう。

誰しも、姉妹船が何であるのかが正確にわかりさえすれば解明の扉を開けられる、という見当はつく。小論では、有用な知見を手掛かりに、さらに必要最小限の知識を入手しつつ、姉妹船といういわば外堀を埋めることから、解析を進めていくことにしたい。

1. 先達の知見

言語については、これまでの研究には見るべきものがほとんどないが、二人の先達が「枯野」解明の過程で示したものが有用と思われるので、見ておきたい。

茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたため、その当て字として「枯野」(『古事記』)、「枯野、軽野」(『日本書紀』)が使われたのではないかと推論している。

現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後、カリブ海の実住民から伝えられたものであり、そのアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。茂在氏は、『記紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった¹⁰¹⁾。その説は、重要な提言ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している¹⁰²⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます(ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ

語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」)。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」(マオリ語では、タウルア、TAURUA)と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キッチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の「カウ・ラ・ヌイ」KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」「カウルア・ヌイ」KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の「カウ・ヌイ」KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明に向けた極めて重要な手掛かりとなる。

2. 『万葉集』の例

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので²⁰¹⁾、井上氏

の説くところを手掛かりにして、考察を加えてみたい。

・・・『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰(四三三六)、伊豆手乃船(四四六〇)と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船(巻十二、三一七二)、真熊野之船(巻六、九四四)、真熊野之小船(巻六、一〇三三)、安之我良乎夫禰(巻十四、三三六七)などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三六六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

まず、(四三三六)の「伊豆手夫禰」²⁰²⁾と(四四六〇)の「伊豆手乃舟」²⁰³⁾である。

外来語を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意訳の二つの方法がある。

中国語では、どちらも漢字で表記することになるが、音訳してみたもののわかりにくいかもしれない、と考えられる場合、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法が採られることが多い。

例えば、beer や card という単語は、「啤」や「カ」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない(例：扎啤、[ジョッキに入れた]生ビール；信用卡、クレジットカード)。ところが、「啤」や「カ」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

「外来語+類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古代日本語に既に存在している。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫禰」や「舟」という類名を加えて、「手夫禰」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、どちらも、「手乃」と呼ばれる船である。表記の違いは、(四四六〇)では、「手乃」をそのまま使うことができたが、(四三三六)

では、音節数の制約を受けて、やむなく一文字省略せざるをえなかった、ということから生じている。そして、歌人は、一文字省略するに当たって、前の「手」を略して後の「乃」を残したのではなく、後の「乃」を略して前の「手」を残したのである。

もちろん、逆に、(四三三六)で「手」と詠まれた船を、(四四六〇)では二音節で詠むために、「手」に「乃」を後置して「手乃」とした、と見なししても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、意味は取れなくとも、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造であることは見て取れる。なお、「手」は、意味も知らずに訓みの一つ当てただけであって、歌人が「手」と詠んでいた可能性を排除してはいけな^い。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」と「て」の二音が存在していたと考えてよい。

次は、(三一七二)の「熊野舟」²⁰⁴⁾、(〇九四四)の「真熊野之船」²⁰⁵⁾、(一〇三三)の「真熊野之小船」²⁰⁶⁾である。

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、同じタイプのものを指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の関係で「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の「安之我良乎夫祢」²⁰⁷⁾である。

先の例と同じく、これらの単語も「外来語+類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

「小/乎」を「を」と訓むのは、後人の訓み誤りで、歌人は、「こ」と詠んでいたはずである。後人は、万葉人がたまたま使った「小/乎」がたまたま「を」と読めるために、接頭語か形容詞と誤解したが、熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と訓むべきものである。この訓み誤りは、「小船」や「乎夫祢」の語義がわからなくなってしまったことに起因している²⁰⁸⁾。

漢字がわかる者は、字形の示唆する意味からな

かなか自由になれない。この問題もそうだが、漢字が表音のために用いられていることを見抜かねばならないケースでも、字形で解け(た気分になれ)れば、思考がそこで停止してしまう。

歌人は、表音のために「小」や「乎」を用いたのであり、その字形が示す意味は特に考慮されていない、と考えてよい。(三三六七)の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまったのも無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する音訳の外来語ということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau·nui」を、そして、「子/乎」は、「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃(tau·nui)」が正確な表現である。しかし、実際には、(四三三六)の「手(tau)」が(四四六〇)の「手乃(tau·nui)」と同じ大型船を指すように、大きいことを明言する場合を除き、「手(tau)」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーが大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「子/乎(kau)」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手(tau)」が使われ、熊野や足柄では「子/乎(kau)」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手(tau)」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「子/乎(kau)」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

これで、古代の日本には、修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの(kaulua·nui、枯野/軽野; kau·nui、狩野; tau·nui、手乃)と、「nui」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの(tau、手; kau、子/乎)があったことがわかる。

3. 姉妹船

「大目亀籠」の姉妹船は、重複するが、『古事記』では、「無間勝間之小船/無間勝間之小船」であり、『日本書紀』では、「無目籠」、「無目堅間」である³⁰¹⁾。考察の便宜上、これらをひとまず「無目^{かたま}籠之小船」の一語に括しておく。

この船は、「竹で固く編んだ、すきまのない小舟³⁰²⁾/隙間のない竹の籠³⁰³⁾/隙間なく竹を編んだ小さな籠^{かたま}の船³⁰⁴⁾/密に編んだ隙間のない籠^{かたま}³⁰⁵⁾」、と説明されている。

籠は、所詮、籠である。竹籠にどう手を加えたところで、大海へ乗り出すには貧弱すぎる。大事な任務を持って遠くへ出かける時にわざわざ造って乗るようなものではない。

茂在氏は、次のように述べる³⁰⁶⁾。

・・・無目堅間小舟・・・は御存知であろう。・・・在来は目つぶしをした篋の舟と訳しているこの船。無目は水密など訳しても良いが、その後を私は次のように考える。

カタマランを、元の響きを残して日本語に訳せといったら、「カタマ小舟」と訳すのは無理な話であろうか。私は「堅間小舟」は文字に意味があるのではなくて、発音に対する当て字が使われたのだと解釈する。・・・もっともカタマランとはタミール語である。カタとは「結ぶ」マランとは「木」で、筏のことも双胴船のこともカタマランと呼んでいたのには数千年の歴史がある。

茂在氏が、「籠^{かたま}」を、カタマランの音訳である、と看破したことは、画期的であり、その功績は大きい。しかしながら、「無目」を、水密な、と解釈したことは、従来の解釈の域を出るものではない。水密でない船は、水上の乗物としては不適當である。『記紀』は、どの船にも求められている必須条件にわざわざ言及しているわけではない。この「無目」は、文字通り、「目がない」という意味なのである。

中国語では、龍の装飾があるものを、単に龍と言うことがある³⁰⁷⁾。龍舟節/龍船節で使用する船には龍の装飾が施され、一般には、龍舟/龍船と言うが、単に龍と言ってもよい。

苗族の文化では、船は龍に同じ、と考えられているが、このような、船を龍と同一視する考え方

は、例えば、浙江省の舟山（杭州湾）地区にも見られる。ここで、この地区の漁船について書かれた文章を一つ見ておきたい³⁰⁸⁾。

长江口外东海杭州湾一带，是中华古国最早出现海上渔船的海域之一。现今概念上的嵊泗渔场，正是处于这片江海交汇丰饶大海域的最佳区位上。・・・据考古，上古时期的吴越风俗由海洋传播至嵊泗列岛。由此推断，最早出现在杭州湾外长江入海口之嵊泗海域上的，当是独木渔舟。・・・在相当长一个时期内，这种独木舟式的渔船之船头两侧没有船眼装饰，因此渔民唤之为“无眼龙头”。

船の舳先は、船頭と言ひ、龍舟/龍船の場合には龍頭という言い方があるが、普通の船でも龍頭と言うことがある。舟山（杭州湾）地区では、長期にわたり、丸木舟形式の漁船の舳先（船頭、龍頭）の両側には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾がなく、漁民はそれを「無眼龍頭」と呼んでいた。

舟山（杭州湾）地区の漁民が使う「無眼龍頭」。これが、「無目籠」が船眼の装飾がない船であることを教えてくれている。『記紀』の物語が成立した頃の日本にも、船を龍と見なす人々、船眼の装飾がない船を「無目籠」と呼ぶ人々がいたのではない。少なくとも、その頃の日本人がそのような文化が世の中にあることを知っていたことは、間違いない。

では、「無目籠」は、なぜ、「無目籠」と表記されたのであろうか。

龍は、想像上の動物である。「無目籠」という表記をそのまま採用すると、人間が人間に作れるはずのない龍を作ることになり（作無目籠）、合理的ではないと考えられたのであろう。『日本書紀』には、さらに、竹を取って「大目亀籠」を作った、とあるので、籠は、龍と竹の二つの情報を同時に伝える好個の文字と考えられたのではない。

「無目籠^{かたま}之小船」は、意味のよくわからない「無目籠^{かたま}」に、よく知られている「小船」を後置して意味説明を補足する形式を取っている。

茂在氏は、上に引用した通り、カタマランは「カタマ小舟」と訳せる、と言う。全体像の捕捉という点で問題はないが、正確ではない。この着想で訳すなら、カタマランは、「カタマ船（勝間船/堅間船/籠船）」となるからである。

先に、外来語を取り入れる場合、大きく分けて

音訳と意識の二つの方法があり、音訳では、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある、と述べた。そして、beer や card は「啤酒」や「卡片」である、と例示した。泡があるとか、小さいとかいう要素を類名に持たせることはないの、いくら泡があったり、小さかったりしても、「啤酒」や「卡片」が、「啤酒泡」や「卡小片」となることはない。「之」を介していることからわかるように、「無目かたま籠之小船」の「小船」は、類名ではないのである。

シホツチの老翁は、第三者がその小ささに言及せねばならないほど、明らかに形状が小さい船をわざわざ作って山幸彦に提供したわけではない。この「小船」が、決して、小さい船という単純な意味で使われているのではないことは、もうわかりであろう。「小船」は、ここでは、「コ (kau) と呼ばれる船」のことであり、すでに検討した通りである。

さて、「無目かたま籠之小船」は、考察の便宜のために創作した仮の言葉である。およそその意味が取れたところで、この一語に括る前の、個々の表記の出入りも検討しておきたい。

『古事記』には「之小船」が付され、『日本書紀』にはそれが無い。語部の言うカタマは補足説明なしにはもはや理解できまいという危惧は、『記紀』の編纂者に、程度差はあるものの、共通して見られる。『古事記』は、「無間勝間/無間勝間」の直後に「之小船」を付すことで、『日本書紀』は、文末の「一云」で「是今之竹籠」と述べることで³⁰⁹⁾、意味説明を補っている。両者は、表現の手法や用いた漢字こそ異なるが、伝えようとする情報には違いがない。どちらも、今の言葉で言うコ (kau) に相当する船であることを伝えようとしているのである。

外来語は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。『記紀』における「勝間」と「堅間」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（あるいはできなかった）ために生じている。『記紀』がそうしなかった（あるいはできなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。「小」と「乎」、さらには、「籠」の揺れも、同じ理由によるものである。

「無目」には「無間/無間」と「無目」のバリエー

ションがあるが、いずれも、VO構造である。この構造は、この表現が、音声を表記したものではなく、意味を表記していることを示している。言い換えれば、「マナシ/まなし」という音声ではなく、「まなし/まなし³¹⁰⁾」という意味を表記しているのである。

残るは、「間」と「目」の出入りであるが、表記に違いはあるものの、伝達しようとする情報には違いがない。「間」と「目」は、ともに「目/眼」のことである。

同一情報の記録に同一表記を用いる手法ほど単純明快なものはない。『古事記』の編纂者は、語部が口にした二つの「マ」という音声のどちらをも「間」で書き記したが、後人は、同一表記（間）が同一情報（マ）を伝えていることを見て取ることもできなかった。

答は、既に出てくる。先に、船には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾を施さないものがある、と述べた。『古事記』は、「マタノタタラ」という音声情報を「間」と書き記し、『日本書紀』は、「船の眼」という意味情報を「目」と書き記したのである³¹¹⁾。

以上を踏まえて解釈すれば、「無目かたま籠之小船」の意味は、次のようになろう。

「舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランという船で³¹²⁾、ある文化圏では無目籠と呼ばれ、船材に竹を用いているが、今の日本語では、外来語のコ (kau) と組み合わせ、通常、こぶねと呼んでいるものに相当する船」である。

「無目かたま籠之小船」が示す全体像には圧倒される。四方のことを、東西南北とも言うが、この一語には、東のポリネシア文化に加えて、南方のタミル語圏の文化と西の中国江南の文化までもが織り込まれている。古代の日本人が途方もなく広い地域の人々と交流があったことには、改めて驚かざるをえない。

4. 「大目亀籠」

4-1. 表記の誤り

「大目亀籠」は、表記に誤りがある。

「大目」が「無目」を書き誤ったものであることは、容易に見て取れる。それを訂正すると、「亀」が浮いてしまうが、それは、「無目」を「大目」と誤認したことに付随して生じた誤記であり、やはり正されねばならない。では、『日本書紀』は、ど

のような漢字を「亀」と誤認し誤記したのであろうか。漢字や古典を知る者なら、「龜」と見当をつけるのに、それほど時間はかかるまい。

語部が提供した音声情報は、記録の段階では、「无目龜籠」という文字表記を与えられたはずである。その後、編集の段階で、書かれたことの意味が取れず、「沈」(後述)とつじつまを合わせるため、「无目」を「大目」に、「龜」を「亀」に書き換えたわけである。

「无目龜籠」とその姉妹船が登場する説話は同じものであり、「无目龜籠」と姉妹船は同じ船である、と理解してよい。つまり、この「无目龜籠」と姉妹船の「无目籠カグマ之小船」とで、表記の上では龜(以下、特に必要な場合を除き、亀)の有無という違いはあるものの、実際には姉妹船も亀を船載していた、と理解してよい。

亀は、そこから情報が取れない者には余計な存在であろうが、この一文字がもたらす情報は、計り知れないほど重要である。亀は、亀でしかないが、海の民は、いわゆる亀を外洋船に乗せない。では、彼らは、どのような動物と共に航海したのだろうか。

4-2. 鳥の船載

情報には、一般に、目で受容するもの(以下、視覚情報)と耳で受容するもの(以下、音声情報)の二種がある⁴⁰¹⁾。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダがない時代にあつては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報(図像や造形等)に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

唐古・鍵遺跡(奈良県磯城郡田原本町)の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。東殿塚古墳(奈良県天理市)の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、舳先に鳥が描かれている。珍敷塚古墳(福岡県浮羽郡吉井町)の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

古代の日本において、一部の情報は、非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されている。言い換えれば、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部によって代々引き継がれ、後に『記紀』等の文字情報に変換された音声情報には重なる部分があるということである。日本の古典を知る者には容易に見当がつくであろうが、土器や壁画に彫ら

れた図像と語部の口承に共通する情報とは、人々は鳥を船に乗せて航海した、ということである。

「天鳥船」、「天鵠船」⁴⁰²⁾では、漢字の表意機能が利用されており、字面の通り、「鳥」、「鵠ハトリ」と取ってよい。なお、「天鳥船/天鵠船」の「天」は、表面上、意味表記に見えるが、実は、例えば、天井や天汁の天や丸芳露⁴⁰⁴⁾の丸と同じく音声を表記したものであり、天(天空)の意味はない。「天」とは、「アウトリガー・フロート」(ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float.⁴⁰⁵⁾)のことである⁴⁰⁶⁾。

「天鰲船⁴⁰⁷⁾」では、鳥という情報を伝える漢字は、字形に意味がなく音声に意味があるため、理解するには、先の「天」同様、言語の知識がある程度必要である。鰲の船が水に浮かぶことはないことから、意味表記ではないことがわかるが、「鰲」とは、「軍艦鳥」('iwa. Frigate or man-of-war-bird⁴⁰⁸⁾)のことである⁴⁰⁹⁾。

「鰲」は、適切な言語の知識がなければ、「鰲」と誤解するのは必至であるが、『記紀』の一部の単語には、そのような誤解を避ける工夫がされている。「鳥之石楠船」、「鳥鰲櫟樟船」⁴¹⁰⁾という表記は、冗長と承知の上で、「石/鰲」を石や岩の「石/鰲」ではなく鳥の「石/鰲」にどうあっても紛れなく理解してもらうために、「鳥之/鳥」という情報を敢えて冠したものであるが、後人は、書かれたことの意味を取ることもできなかった。

最後は、「无目龜籠」である。前述の通り、非文字情報と、後に文字情報に転換された音声情報に共通する情報は、人々は鳥を船に乗せて航海した、ということである。そして、船名を構成する動物は、鳥である。そうすると、この亀は、鳥と解析するしかない。つまり、私たちにとって、亀とは、通常、爬虫類の亀であって鳥類の亀を意味することはないが、古代日本語ではある種の鳥を亀と呼んでいた、と解析せざるをえない。

古代人がある種の鳥を亀と呼んだ例は、他にも存在するのであろうか。

例えば、古代英語では、turtle は、turtledove の一般的な略称であった⁴¹¹⁾。

"Turtle" was a common archaic English shortening of the name "turtledove."

turtledove は、通常、キジバトと訳されるが⁴¹²⁾、小論では、亀鵠と訳しておく。そうすると、全称



珍敷塚古墳の船と鳥

の *turtledove*/亀鳩を上略した形が *dove*/鳩で、下略した形が *turtle*/亀であることが容易に見て取れる。亀鳩は、考察の便宜のため試みに訳したものであるが、古代日本語には、上略した形の鳩や、下略した形の亀が存在したのみならず⁴¹³⁾、全称の亀鳩も存在したのではないだろうか。ハワイ語には、*kuhukukū* という単語があり、鳩もしくは亀鳩を意味する (*kuhukukū*, n. Dove, *turtledove*⁴¹⁴⁾)。 *kuhukukū* が、*turtle* と訳された例を挙げておく⁴¹⁵⁾。

The voice of the turtle, (archaic for turtledove), ka leo o ke kuhukukū.

では、海の民は、何のために、鳥を船に乗せて航海したのであろうか。

外洋航海で、目標の陸地や島が視界に入っていない場合に、あらかじめ船に乗せておいた鳥（特に、ハトやカラスなどの陸鳥）を飛ばすのである。鳥が飛び去るなら、その方向に陸地や島があることがわかり、船に戻って来るようであれば、近くには陸地や島がないことがわかる。

外洋船に鳥を積み込むことは、乗員が生きて再び地面を踏むことができるかどうかに関わる極めて重要な行為であった。その重要度の高さは、鳥の舶載が非文字情報と音声情報（後の文字情報）の二種の媒体に登場することからも窺い知れるが、例えば、「天鳥船」を構成する三要素の中の一要素を「鳥」が占めることから理解できよう。

4-3. 動詞の意味

『日本書紀』に、「一云、以無目堅間為浮木、以細縄繫著火火出見尊而沈之。所謂堅間、是今之竹籠也」（神代下、第十段、一書第一）とある。

「沈む/沈める」（以下、「沈」）は、「人や物が水

面上から水面下に移行する/移行させられる」ことである。「沈」に乾湿二方式があることは、海陸両文化に共通する。人や物は、「沈」が乾式であれば、濡れることはないが、「沈」が湿式であれば、濡れる上に、人間の場合、その状態が4～5分を超えると、死に至る。従って、この場合の「沈」は、乾式の「沈」でしかありえず、湿式の「沈」を決して想定してはならない。

ところで、湿式の「沈」は、海陸両文化で意味・用法に違いがない。そのため、人々は、類推により、乾式の「沈」の意味・用法も両文化で違いはない、と思込む。思い込みがあっても、意味・用法の広い側（以下、「広」の側）が狭い側（以下、「狭」の側）のことを理解するのに問題が生じることはないが、逆の場合には、問題が間々生じる。

乾式の「沈」は、海の文化では使う対象に制限がなく使用面が広いのに対して、陸の文化では使う対象に制約があり使用面が狭い。両文化における「沈」の使用面の広狭の差に加え、そのような差異が存在すること自体に気付いていないために、「狭」（陸の文化）の側は、「広」（海の文化）の側の意味・用法が理解できないのである。そのために、「沈」を、決して想定してはならない湿式の「沈」に解釈した挙句、つじつまが合うように船名の表記に手を入れることまでしてしまったのである。

海の文化では、乾式の「沈」は、人であれ物であれ、何かが水平線の下に消えることである。これに対し、陸の文化では、人が触れることのできない物（例えば、星・月や太陽）には乾式の「沈」を考え（られ）るが、人が触れることのできる物（例えば、船舶やその乗員）には乾式の「沈」を考え（られ）ない。

水平線へと進みゆく船は、やがて、星・月や太陽と同じように水平線の下に消えていく。その様子を日々観察し実地に検証した海の民が、船のこの種の「沈」を、星・月や太陽の「沈」と同類のものと考えたことは、本質を捉えた極めて自然なものであったが、その発想は、同じ視点を持たない陸の民には想像すらできないものであった。

落水は、危険である。今日のヨットでも、航走中に船から人が落ちると、救助は難しい。夜間や荒天時に落水すると、救助はさらに難しくなる。それは、波間に入った落水者を一瞬にして見失うからであるが、ビギナー、ベテランを問わず、毎年、多くの人々が落水で死亡している。海上保安庁の発表によると、平成15年の海中転落事故の生

存率は、21 パーセントである⁴¹⁶⁾。海に加え空からも捜索・救助活動が行なわれる今日でさえ、落水して助かるのは五人に一人である。古代において、外洋航海中の落水は、死を意味したであろう。

落水に備えて、今日のヨットには、テザー（ハーネスライン）という、艇と体を繋ぎ止める命綱がある。古代の海の民にとっても、「板子一枚、下は地獄」であり、落水に対する備えは欠かせなかった。亀の舶載は、遠洋航海や命綱の使用を示唆するが、装着を本人任せにしない念の入れようは、火火出見尊の身分の高さを物語るものであろう。

「一云」に始まる文章は、僅か 33 文字であるが、提供する情報の質の高さは、秀逸である。

渡航用船舶として船眼装飾のないカタマランが準備されたこと、落水に備えた命綱は、火火出見尊には船上で動きやすいように他の乗員よりも細めのものが使用されたこと、尊の命綱は、本人ではなく他人がしっかりと装着したこと、装着確認後に出航しており、発航前点検がきちんとなされたこと、一行に対する見送りは、船影が水平線の下に消えるまでの鄭重なものであったこと、そして、この物語に登場するカタマランは、今風に言えば、竹でできたコ（kau）という船に相当すること、などが読み取れる。ポイントを押さえた、正確な内容には、驚きを禁じえない。

音声情報は、通常、転換された文字情報に保存されているものであるが、このケースでは、その限りではない。ご覧の通り、「おほまあらこ」は、決して何か由緒やいわれのある名を伝えているわけではない。単に、「無目亀籠」が「大目亀籠」と誤記された後に、名称もわからず意味も取れないまま、漢字表記に基づいて、読みが一つ施されているに過ぎない。日本語の読みは、「無目亀籠」に基づいて再構するしかないが、姉妹船名との整合性を考慮すれば、「無目」を「マなし」に、「籠」を「カタマ」に読むことに、問題はなかろう。また、「亀」は、姉妹船にはないが、「かめ」に読んでもよからう。小論では、とりあえず、「無目亀籠」の読みを「マなし・かめ・カタマ」としておく⁴¹⁷⁾。

5. おわりに

「大目亀籠」は、適切な海の民の視点を欠いたままでは、正確に解けない。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、

海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「大目亀籠」の原表記が「無目亀籠」であることを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、ポリネシア語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

注

001) マナシは「目無し」、カツマは竹籠で、カタマ・カタミともいう。固く編んですきまのない竹籠の意。神代紀には「^{まなし}無目^{かたまたま}籠」とある。西村真次は「無間勝間の小船」をベトナムの籃船と比較して、竹製の目を椰子油と牛の糞をこねた塗料でふさいだ船であるとし、また松本信広は竹製の目を漆で填隙した船と解している。(荻原浅男他校注 1973.p.138 頭注 3)

002) 「無間勝間」は、編んだ竹と竹との間が堅く締まって、隙間がない籠をいう。それを船として用いたのであり、船の形に作ったのではない。これを、潮路に乘せるのであり、漕いで行くわけではない。『書紀』にはこれを海に沈めるとあり、『記』とは異なっている点、注意される。(山口佳紀他校注 1997.p.126 頭注 4)

003) 隙間のない籠。「籠」はコとも訓むが、古訓のカタマによる。これは一書第一（一六三^ぎ）の「^{まなし}無目^{かたまたま}堅間を以ちて^{うけき}浮木^{つく}に為り」について、「所謂堅間は、是今の竹籠なり」とみえ、カタマは竹籠^{たけのかご}の意である。・・・記に「^{まなし}無間勝間の小船」とあり、カツマの語形もある。(小島憲之他校注 1994.p.156 頭注 8)

引用の際の省略個所は、・・・、で示す。以下同じ。

なお、小島氏に限ったことではないが、「竹^{たけ}籠^{のかご}」を「竹籠^{たけのかご}」と言い換えるのは、間違いである。両者は、名称も形状も異なる全くの別物であり、「竹籠^{たけのかご}」とは、「竹籠：たけのコ」のことである。注 309) 参照。

004) カタマは竹製の籠。カタマは「^{かたまたま}堅編」の意かという。カツマ・カタミとも。(小島憲之他校注 1994.p.163 頭注 15)

005) 編目の粗い竹籠。これは「無目籠」（一五七^ぎ）の目のつまった籠とは反対に、目が粗いからすぐ沈んでしまう。(小島憲之他校注

- 1994.p.163 頭注 12)
- 101) 茂在寅男 1984。
「枯野」等の解釈に外来語という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。
- 102) KAMAKURA OUTRIGGER CLUB <http://lei.land.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>. Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.
これは、管見に入った唯一有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoe と説明しているが、自身の HP (夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>) では、kau = canoe としている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986 には、「kauahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p.135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p.137)の例があるので、kau を canoe と理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。
- 201) 寺川真知夫 1980.p.141-p.142。
- 202) 小島憲之他校注 1996.p.390 の原文表記。
寺川真知夫 1980.p.142 は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。
- 203) 小島憲之他校注 1996.p.437 の原文表記。
なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。小島氏には窮余の策を講じるしかなかったが、歌の趣では、正しく解けるとは限らない。実際、この例でも、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいのに(後述)、逆に解釈をしてしまっている。趣に頼って「手/手乃」の大小を論じる必要は、もはやない。
- 204) 小島憲之他校注 1995b.p.369 の原文表記。
- 205) 小島憲之他校注 1995a.p.121 の原文表記。
- 206) 小島憲之他校注 1995a.p.162 の原文表記。
- 207) 小島憲之他校注 1995b.p.464 の原文表記。
- 208) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注 203)で、歌の趣では正しく解けるとは限らない、とは書いたが、歌等の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなかろう、と感じられることがあるのではないか。
- 301) 姉妹船の注は、それぞれ、注 001)、注 002)、注 003)、注 004)参照。
- 302) 荻原浅男他校注 1973.p.138 の現代語訳。
- 303) 山口佳紀他校注 1997.p.127 の現代語訳。
- 304) 三浦佑之 2002.p.109 の現代語訳。以下の脚注も見える。
原文には「^{まなしかつま}無間勝間の小船」とあり、カツマ(カタマとも)は竹籠の意だが、ここは、目のない(マナシ=目無し)竹籠であり、海中に潜ることのできる潜水艦のような船をイメージしているのだろう。海底にあるワタツミの宮に行くための船である。昔話「浦島太郎」のように亀の背に乗って海底の龍宮城へ行ったら溺れてしまうはずだ。
- 305) 小島憲之他校注 1994.p.157 と p.163 の現代語訳。
- 306) 茂在寅男 1984.p.3-p.4。
なお、太平洋学会審査・編集委員会(松永秀夫委員長)から、カタマランの語源をタミル語とする説は A. C. Haddon and J. Hornel 著 Canoes of Oceania (Bishop Museum Press、1938 年刊、1975 年復刻)が初出、との教示を受けたが、未見。太平洋学会編『太平洋諸島百科事典』(原書房、1989 年)p.118-p.120、「カヌー」(松永秀夫)参照。
- 307) ④飾以龙形的。如：龙勺；龙旗。亦借指饰以龙形之物。(罗竹风主编《汉语大词典》(第十二卷)、汉语大词典出版社、1993、p.1459)
- 308) 牧鱼人、<http://www.ds.zj.cninfo.net/haiyangwenhua/muyuren/gongjuyanbian/003.htm>。
- 309) 『日本書紀』の注釈の意味は、もうおわかりであろう。「竹籠^{たけのこ}」とは、「竹の籠^こ(kau)」のことである。注 003)参照。原文は、4-3. 動詞の意味、参照。
- 310) 『古事記』は、「マなし」、『日本書紀』は、「まなし」である(後述)。
- 311) 「目」は、音義融合とも取れる。現代中国語の例：引得(yǐndé)、インデックス。
- 312) カタマランという言葉は、古代から使用範囲が広いが、小論では、茂在氏の説くところに従う。なお、滋賀県の地名「堅田」の「堅」の意味・用法も、堅間のそれと同じである。
- 401) 触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。
- 402) それぞれ、『日本書紀』(神代下、第九段、一

書第二)と、(神代下、第九段、正文)。

403) 鴿は、ハトの総称と理解してもよく、後述する「亀鴿」の略称と理解してもよい。

404) マルボーロ。「丸」は、音義融合とも言える。注 311) 参照。

405) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.22.

406) 茂在寅男 1984.p.2・p.3 は、「アウトリガー」とする。一般には「アウトリガー」が使われるが、ここでは、「アウトリガー・フロート」を用いた方が紛れがない。

407) 『日本書紀』(神武天皇)。

408) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.104.

409) 初出は、茂在寅男 1981.p.54・p.64.

410) それぞれ、『古事記』(上巻)、『日本書紀』(神代上、第五段、一書第二)。

411) Miguel Venegas、<http://www.goldengateaudubon.org/birding/earlybirds/TheyCameBySea.htm>.

412) 小西友七・南出康世主編『ジーニアス英和大辞典』大修館書店、2001、p.2310.

413) 鴿については、字面の助けもあり、大きな問題はないが、亀については、知識が継承されず、字面からの誤解も加わり、正確な意味を取ることができない。

414) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.174.

415) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.550.

416) 救命胴衣(ライフジャケット)未着用者のデータ。着用者の生存率は 82 パーセント。

(第十管区海上保安本部 HP、<http://www.kaiho.mlit.go.jp/10kanku/anzen/>)

417) 音声情報は、再構しきれたとは限らない。単語の読みは、通常、構成要素の総和と同じであるが、そうではない場合もあるからである。「无目亀籠」が後者に属するようであれば、「マなし・かめ・カタマ」の読みは、修正されることとなる。

古典文学全集 2)』、小学館。

—————1995a.『萬葉集②(新編 日本古典文学全集 7)』、小学館。

—————1995b.『萬葉集③(新編 日本古典文学全集 8)』、小学館。

—————1996.『萬葉集④(新編 日本古典文学全集 9)』、小学館。

寺川真知夫 1980.『仁徳記』の枯野伝承の形成
土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』、笠間書院。

三浦佑之 2002.『口語訳 古事記[完全版]』、文藝春秋。

茂在寅男 1981.『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。

—————1984.『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。

山口佳紀他校注 1997.『古事記(新編 日本古典文学全集 1)』、小学館。

<その他>

Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert, 1986. *Hawaiian Dictionary*. University of Hawaii Press.

〔付記〕

1. 審査・編集委員会(委員長・松永秀夫氏)からご教示を受けたことに感謝する。
2. 図版は、『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』(茂在寅男、光文社、1981) p.61 から転載した。

参考文献

<日文>

荻原浅男他校注 1973.『古事記 上代歌謡(日本古典文学全集 1)』小学館。

小島憲之他校注 1994.『日本書紀①(新編 日本

